

# 文 國 大 女 子

第百三十五号

平成十六年六月発行

---

和解本善書の研究……………	八木意知男(一)
——「功過自知録大意」の問題——	
『天竺往生験記』に関する一、三の覚書……………	中前正志(一五)
〈安全な場所〉の崩壊……………	峯村至津子(五〇)
——「ゆく雲」に於ける手紙の意味——	
中古の指示副詞「かう」について……………	井上博嗣(六)
——「かく」との比較にみられるその位相性——	
誤植訂正のお願い……………	(一〇三)
彙報……………	(一〇三)

誤植訂正のお願い

前号(第百三十四号)掲載各論文冒頭に付された日付(発行年月日)に誤植がありました。混乱を招きましたこと、深くお詫び申上ます。次のように御訂正方、お願いできますれば幸甚に存じます。(いずれの日付も)

平成十五年十二月二十日↓平成十五年十二月三十日

彙報

研究室だより

- 大野修作教授が、本年三月末日をもって依願退職されました。
- 山崎ゆみ助教授が、四月より(来年三月迄)国内研究員として、天理大学にて研究に専心されています。
- 本年度の教室主任は加納重文教授で、徳永道雄教授・中前正志教授・峯村至津子助教授とともに教室の運営に当っておられます。

二〇〇三年度修士論文・卒業論文題目

大学院文学研究科国文学専攻

「ほのぼのと」歌解釈の系譜

前田 智 香

古今伝授の中の移相

平安時代の仮名消息について

井ノ尾 文

李清照「詞」論

日野 佑 美

西鶴『懷硯』の研究

山 根 映 美

文学部国文学科

古 代

万葉集三四一四番歌について —虹を中心に—

乾 博 惠

「是貞親王家歌合」 —虫の歌を中心に—

大 石 麻 由

「蹴鞠百首和歌」論究

釣 部 有 希

—蹴鞠の家飛鳥井家の家業—

釈教歌の研究 —歌語「三の車」考

中 村 麻 子

『万葉集』の山越えの歌

野 尻 景 子

万葉の「香」

藤 尾 綾

武蔵国相聞往来歌

佐 藤 亜 季 子

万葉集の桜の歌について

柚 木 原 由 美

西行が桜の歌に込めた想い

重 見 希 枝

—「ねがはくは」までの変遷—

花山院について

中 川 久 美

伊勢物語と女性

青 木 美 香

平安朝文学作品からみる婚姻儀式

ことばに託する祈り — 日本人の思想小考 —

『落窪物語』における受領層

物語の女君 — 『虫めづる姫君』の場合 —

斎院選子と中宮定子について

— 『枕草子』における —

『落窪物語』における「裁縫」

日本古代の天女と昇天

— 『竹取物語』の思想小考 —

平安の薫物

— 貴族の感覚と薫物の受容の変遷とその種類 —

明石御方親子と植物

『紫式部日記』論

— 「思ひかけたりし心」のさすもの —

『落窪物語』における阿漕の女房像

— 源氏物語の女房と比較して —

女性における漢詩文的教養

宇治十帖の風土

岡島 縁

加納 恵

楠原 美久

熊木 愛

出口 優美

中尾 未来

中林 敦子

中村 弥生

中本 美紀

松本 麻希

三木 径子

渡邊 雅子

岩瀬 成美

申し子譚について — 『御伽草子』を中心に —

毘沙門天の変遷 — 鞍馬寺を背景に —

『鉢かづき』についての一考察

— 鉢の意味を中心に —

「虫めづる姫君」にみる風変わりな姿

毘沙門天信仰について — 「戦」と「福」の関係

『とはがたり』雪の曙考 — 虚像と実像 —

御伽草子と餅

『平家物語』における清盛像

— 真の「悪行」とは何だったのか —

「有明の月」小論 — 破戒の背景 —

中世の地藏信仰

異類物についての一考察

— 人間と動物の関わり —

七草行事について

『曾我物語』真名本と仮名本の比較

— 十郎の描かれ方をめぐって —

『小敦盛』単純化の世界

『甲賀三郎物語』

— 日本人の異郷・異界観について —

渥美 彩

内田 堯子

小崎 恭子

川部 恵子

工藤 和美

佐橋 祐美

鈴木 明子

高橋 由香里

宅坊 望

津崎 郁子

徳田 陽子

飛永 尚子

戸部 さやか

中井 彩絵

中山 民子

入木道の秘伝 — 人間形成の視点から —

「姦通」の再考

謡曲（翁）、その神聖観の在り処

中世の遊女・白拍子像

— 平家物語「祇王」を中心に —

陽成天皇の人物像

— 与える印象と実文の対比 —

『うたたね』の執筆意図

『乳母の草紙』 — 新しい見方 —

『宇治拾遺物語』と飛鉢・飛瓶

### 近 世

『男色大鑑』考

— 巻四の三「待兼しは三年目の命」を中心に —

『葉隠』論 — 常朝の「死生観」をめぐって —

『伊曾保物語』考 — その思想的役割 —

西鶴の描いた女性像

— お夏・お七・一代女をめくって —

『桜姫全伝曙草紙』考 — 玉琴と野分の方 —

『心中重井筒』の考察 — 悲劇の原因 —

藤井 詳子

別所 理恵

前田 なつめ

松下 千晶

山口 彩子

山口 彩子

山下 良子

伊藤 麻由美

内田 友美

内田 友美

澤口 梨江

澤口 梨江

島岡 洋美

島岡 洋美

田村 佳子

田村 佳子

手鹿 聡子

手鹿 聡子

藤井 敦子

藤井 敦子

小原 直子

「青頭巾」と「二世の縁」 — 秋成の思考の本質 —

一代女と現代の女性

— 「町人腰元」からみる女性について —

西鶴の衣装描写における特色

— 『好色一代男』と『好色五人女』とを比較して —

『本朝二十不孝』論

秋成と吉備

— 「吉備津の釜」磯良像の成立について —

宮木像にみる秋成の女性観

『万の文反古』の一考察

— 内証と人の心からみる二系列 —

『雨月物語』「白峯」考

『鐘の権三重帷子』考 — 権三の心情を中心に —

近松世話物三作品考

— 妻と遊女の関わりからの視点から —

『西鶴諸国ばなし』論

一茶の幼児性と父性

— 『父の終焉日記』と『おらが春』 —

富樫 綾

今西 景子

小畑 美沙

小畑 美沙

緒方 奈津美

緒方 奈津美

岡 真智子

岡 真智子

羽 瀨 里 穂

羽 瀨 里 穂

中 西 麻 友

中 西 麻 友

天 羽 涼 子

天 羽 涼 子

山 崎 み つ み

山 崎 み つ み

麥 田 千 穂 美

麥 田 千 穂 美

吉 田 香 菜 恵

吉 田 香 菜 恵

藤 田 麻 日

藤 田 麻 日

### 近 代

山本周五郎『柳橋物語』論

赤井田典子

—三色のノートと《愛の片側》—

阿部定と『桜の森の満開の下』・『夜長姫と耳男』との関連

武田泰淳『ひかりごけ』論

徳永史恵

芥川龍之介『蜘蛛の糸』の小説的構成

宮尾登美子の〈女性〉・〈障害者〉観

中川由利子

森鷗外の女性像 —『雁』のお玉を中心に—

—『蔵』の烈という女を中心に—

中原舞子

井伏鱒二論 —「山椒魚」を中心に—

国政亜矢

—理想からの「脱出」と「解放」—

太宰治『走れメロス』論 —「人質」との比較—

好田智美

谷崎潤一郎「卍」の女性像

西田明日香

坂口安吾『白痴』論

三枝香織

—観音のイメージからの考察—

—伊沢と白痴、精神と肉体の関係を中心に—

芥川龍之介『秋』の信子像

西村友里

安部公房「箱男」における匿名性について

嶋岡亜沙美

—当時の女流作家のあり方と比較して—

村上春樹『ねじまき鳥クロニクル』論

立松千恵香

近代文学における「学生」

羽嶋綾香

『Kの昇天—或はKの溺死』論

田中乃里子

—「書生」から「学生」へ—

—太陽と月に見る光と影の二重構造—

三島由紀夫『剣』論 —武士道の視点から—

長谷川康子

芥川作品『歯車』の色彩表現

田中麻美

菊池寛「忠直卿行状記」の忠直像

藤井友美

—宮沢作品『銀河鉄道の夜』を比較して—

—他作品の君主と比較して—

芥川龍之介「秋」に見る掠奪の愛

谷沙織

菊池寛の女性観 —「友と友の間」に見る—

道野享子

—有島武郎の愛の理論との比較—

川端康成『雪国』論 —秘められた禅のこころ—

和田麻由子

『こいりえ』について

千代松温子

菊池寛「入れ札」小考

坂口愛

—一葉の立身出世欲を中心に—

太宰治と「世間」との関わり

三浦友記子

安部公房『他人の顔』論

徳田涼子

—『人間失格』を通して—

芥川の描く芭蕉という問題

三浦沙矢

白居易と「中隠」

佐藤淳美

—『枯野抄』を通して—

頼山陽と吉法師 — 頼山陽の織田信長観 —

田村直子

芥川を持つ英雄像を探る

和田麻美

陸羽の茶の精神

戸渡珠理

—『英雄の器』を中心に—

『月瀬記勝』の紀行文文学的考察

濱口真依

「この子」論 — 主人公の人物造型について —

市川温子

— 紀行文に見る日本漢詩文の影響 —

前田遼子

軒もる月 — 袖の高笑いについて —

上原恵子

曹操の楽府誌 — 政治家としての苦悩と理想 —

岡田理恵子

「高丘親王航海記」論

岡田悠

『悦楽』 — その背景にあったもの —

岡田理恵子

—〈夢〉の空間構造と〈女〉—

詩集『山羊の歌』 — 中也の上以降の雪は —

小西優子

国語学

「風船はあがりたくありません」論

杉村知恵子

直截さを避けること

赤堀真梨子

「手袋を買ひに」における母さん狐の母親像について

— 発言における曖昧をめぐって —

井口奈々

武者小路実篤「真理先生」論

藤井幸子

インターネット用語論

井口奈々

「走れメロス」に関する一考察

米田文子

— 一般言語との関連に於いて —

奥田明日香

—メロスは誰のために走ったのか—

—「私の視点」をめぐって—

奥田明日香

「御」の変相

下田茜

水の語彙曼陀羅 — 語義記述の一つの試みとして —

砂走聡子

明治時代における新聞の見出しと本文

藤田佳世

『湘夢遺稿』に表れる江馬細香像

坂井泉美

—『東京朝日新聞』を中心に—

松田愛花

— 頼山陽の女弟子という視点から —

動詞の対義構造

松田愛花

漢文

蕪村へ与えた漢詩の影響

上田恵

『湘夢遺稿』に表れる江馬細香像

坂井泉美

— 頼山陽の女弟子という視点から —

動詞の対義構造

松田愛花

あいさつの一日 — 石川での生活を中心に	山本昌子	若者ことばについて	熊崎 亜妃子
歌がものを読みこむこと — 藤六をめぐる	渡邊 敦子	— 京都女子大学三回生のアンケートより —	
初期未明 — 不思議の文体をめぐる	金澤 麻里	京都女子大学生の敬語意識	國 清 友香里
人と人が接することの表現	兜山 千英子	— 実態調査とその分析 —	
下位感覚の形容詞の世界	木下 智保子	若者言葉	高橋 暁子
野口雨情の童謡	桑田 真琴	— 京都女子大学におけるアンケート調査より —	
擬態語の構造 — 二音節くり返しの場合 —	高島 麻希	徳島県の方言 — 若年層の現状について —	板東 真佐美
文字の遊びについて	千原 祐子	現代の敬語 — 「敬語の誤用」と「変な敬語」 —	東地 浩子
— 『小野篁諺字尽』を中心に —		「ら抜き言葉」について	藤下 真江
翻訳の態度 — 逍遙と恒存の『ハムレノト』 —	藤井道子	— 京都女子大学生へのアンケート調査より —	
佐賀方言による量の表現	椋本 茜	栃木県の方言の現状 — 栃木県の若者における —	船木 美里
— 佐賀県伊万里を中心にして —		福井県嶺北地方の方言	宮崎 さやか
「親和」としてのあいさつ言葉	森川 彩	— 福井市における方言の現状 —	
宮部みゆきの表現 — 「視点」をめぐる —	若槻 美歩子	宇治市の方言	森崎 あゆみ
大阪方言について — 残存状況と使用意識 —	大森 八恵	— 若年層における現状のアンケート調査 —	
山田孝雄についての一考察	小川 優子	子どもの「ことばの発達」に応じた絵本	安川 真知子
大阪弁と標準語の、場面による使い分け	川戸 彰子	— 日本人の「ことば」の意識 —	
— 大阪の高校生の標準語意識 —		大阪方言の現状 — 茨木市・高槻市における —	渡辺 知佳
高校生における「京言葉」の認知・使用について	北川 絵里		
大阪方言の現状 — 和泉地方における —	楠見 依子		

二〇〇四年度国文学会行事（前期）

○新入会員オリエンテーション

四月三日（土）午前十二時三十分より B501教室にて

○新入会員歓迎行事 南座歌舞伎鑑賞教室

四月二十四日（土）午後二時より

- 一、解説「南座と歌舞伎」 ご案内 桂九雀  
二、道行旅路の花聲 落人 早野勲平 片岡進之介  
腰元お軽 上村吉弥

○春季公開講座（大学と共催）

五月二十七日（木）午後二時四十五分より J420教室にて

講題 『とはずがたり』の文体の魅力

講師 東京大学教授 三角洋一氏

○春季見学旅行（学会旅行）

五月二十三日（日）午前十時～午後五時三十分

石清水八幡宮と松花堂庭園・美術館など

以上の行事が滞りなく終了致しました。

なお、学会旅行につきましては、従来年一回一泊二日のバス旅行を実施して参りましたが、今年度より春秋年二回の日帰り散策

（という新企画）と従来通りのものとを一年交替で行なう試みを実行することとなりました。参加会員の感想文を後に掲げてございますので、御一読下さい。

今後の予定は次の通りです。奮って御参加下さい。

○秋季見学旅行（学会旅行） 行先・日時未定

○秋季公開講座（大学と共催）

十月二十八日（木）午後二時四十五分より

講題 未定

講師 新潟大学名誉教授 元國學院大學教授 宮崎 莊平氏

二〇〇四年度国文学会委員

教員（代表幹事）加納 重文

徳永 道雄 中前 正志 峯村至津子

短大 一 太田 愛美 川口有希乃

二 長谷川莉紗 山田実和子

二 猪妻 えみ 太田絵里子

二 橋本枝里子 髭野 初美

大学 一 石川 裕佳 大谷久美子



- 二 津田 明季<sup>あかり</sup> 村瀬奈緒子  
 二 池田 桃子 百合野智子  
 三(三委員長)田中さゆり(副委員長)前田未知世  
 四 安楽 佳代 黒石裕佳子  
 大学院 角<sup>かど</sup> 美樹 李 婷

## 歌舞伎鑑賞教室

短国一  
 学会委員 川 口 有希乃

先日、私たち国文の一回生は、新入生歓迎行事という事で、南座の歌舞伎鑑賞教室に招待していただきました。

当日、南座の大きなちようちんの下をくぐるとき、歌舞伎を見るのが初めての私は、さながら、初めて訪れた日本へ憧れと期待を持った外国人のような気分だったのだらうと思います。

赤いじゅうたんが敷かれた会場は、どこか厳かな雰囲気でした。

落語家の桂九雀さんにより、軽く歌舞伎に関する実演を交えたお話があった後、演目は落語にうつります。この落語なのですが、ストーリーの最後に用意された「落ち」が巧みで、大爆笑。

演目が終わってからも、私はしばらく手を打って笑っていました。

さて、充分すぎる程の前座を置いて、演目はいよいよ歌舞伎です。場内は静寂に包まれ、ゆつくりと、厳かに、金箔のようなものが舞台を舞います。そして、役者の登場。悲劇が喜劇に変わり、最後の、前座と連携した「落ち」でのしめくりは、とても見事でした。

私が今回鑑賞させていただいた歌舞伎は、昔からの伝統を重んじつつも、現代に通じるように趣向が凝らされており、往時を忍ばせられる場面あり、ユーモアに笑う場面あり、と、とても素晴らしいものでした。

ご招待くださった関係の方々、どうもありがとうございます。

## 歌舞伎鑑賞教室に参加して

大国一  
 学会委員 大 谷 久美子

歌舞伎、と言われても、教科書の「日本の伝統芸能」の欄にあるような写真と説明しか知らなかった。私以外にも、そんな人は

多かつたろう。馴染みのないことであつたし、何の機会も、さしたる興味もなく、私には無縁——そう思っていたから、歌舞伎鑑賞教室があると知らされても、実際見るまでずっと面倒臭いことだと思っていた。四月二十四日。四条の南座まで、大学から徒歩約三十分。

満員の観客席で、会場の装飾を眺めるうち、落語家・桂九雀さんの軽快な声で、鑑賞教室は幕を開けた。続いて歌舞伎の概略と舞台仕掛けを説明して下さる、その話が面白くて、思わず笑い声が上がると。そしてその日、歌舞伎役者体験として「勘平とお軽」の役を体験できた、京都外国語大学の女子大生は本当に羨ましい限り。その後、本幕開演に先立って、仕切り直しに九雀さんが落語をひとつ。

歌舞伎の舞台は、それまでの空気をがらりと変え、見事だった。さすがに清元の詞章は聞き取れなかったものの、話の大筋は先に聞いてあつたし、台詞も比較的聞き易く、抵抗なく理解できた。最後の「お軽、おじゃ」まで、ただ舞台に釘付けだった。何とも意外な気がした。自分の耳で聞けることが、案外面白味あることが。良い経験をした、また来てみようか。これを契機に、そう思うようになった。

## 国文学会旅行に参加して

短国二 藤 井 裕 子

五月二十三日、良い天気にも恵まれ、爽やかな一日。午前十時、八幡市駅前集合。駅構内で、中前先生の切符(買ったばかりのスルンとKANSAIのカード)がなくなる!というハプニングがありつつも、そこはうまく峯村先生がフォローなさって、国文学会旅行は無事にスタートを切った。

ケーブルに乗って男山山頂に到着。市内と違って空気が澄んでいることに驚き、すがすがしい気持ちで胸がいっぱいになった。ここから石清水八幡宮への道すがら、何度も鳩を見かけたのだが、動く鳥が苦手な私は、鳩を追い払うことに必死になっていた。すると、鳩は八幡神の死者だということを先生から教わり、思わず本気で鳩に謝っていた。鳩が神様の使いだなんて、実は未だに信じられないのだが、とりあえずこれからは、鳩にいたずらしかけるのは止めようと固く誓った。でも、八幡の鳩以外は良いのかなあ……

石清水では、重要文化財『官寺縁事抄』を特別に見せていただき、学会旅行に参加しなければこんな貴重な体験はできなかった

と思うと、本当に良かった。宮司さんには、本宮の案内もしていただき、興味深いお話も聞け、楽しく時間を過ごすことができた。

お昼を食べた後は、松花堂昭乗に関連する地を巡った。彼が住まった僧坊跡や、彼のお墓のある泰勝寺を訪れた。その後、八幡名物「走井餅」をごちそうになり、参加者全員でおいしくいただいた。このお餅は本当においしかった！

それからバスに乗って、松花堂美術館・庭園に向かった。私は、昭乗について本当に何も知らなかったのだが、行く先々で、先生方をはじめいろいろな方々がお話して下さったので、大変興味を持って見学することができた。庭園内にあった彼の茶室は、芸術の集大成と言える程、凝った作りになっていたように思う。私が今まで見てきた茶室と比べると、どこことなく雰囲気も違って見えた。当時の文化人は、この茶室に集い、茶会を開き：そういったことを想像するだけで、彼が身近に感じられた気がする。

急な階段を登って息があがったり、途中小雨も降ったりしたけれど、学会旅行に参加して、自分の知らなかった京都の歴史や文化、それに関わる文学に触れることができ、また、先生方や他学年の方々との交流を持って、有意義な一日だった。

## 国文学会旅行記

大國三 富 瑠美子

石清水八幡宮。中学の頃、教科書で徒然草第五十二段「仁和寺にある法師」を読んだ。石清水八幡宮まで参拝に行った法師が、山のみもとの社寺を本堂と間違えて、山に登らず帰ってしまうという話だ。それがなんとなく印象に残っていて、私は、いつか行ってみたいと思っていた。そして、遂にその機会がやってきたのだった。

ケーブルの終点から少し歩くと展望台があり、そこからは宇治川、木津川、桂川の流れを手前に、天気が良ければ京都市内から比叡山までの展望が開ける。ビルや高速道路の高架などで、川だけが見えるわけではないが、三つの流れが大きくうねり、集まってくる様子は、なかなか壮大なものを感じさせる。

本堂は、宮司さんが案内をして下さったので、内部の説明も聞かせて頂くことができた。日光東照宮の前年にできており、織田信長の寄進した「金の雨樋」や、左甚五郎作と伝わる「目抜き猿」など、見るものも多い。私は、この「目抜き猿」が大変印象に残った。猿の片目には釘が打ちつけてあって、それは昔、この猿が欄

間から出てきては悪さばかりしていたので、時のご住職が釘を打ったのだそうだ。

ところで、今回の旅には松花堂昭乗という人の名前が欠かせない。松花堂昭乗は、松花堂弁当の名前の元になったことでも有名な、書・茶・絵画等に通じた文化人である。彼は石清水八幡宮の瀧本坊にいた僧で、松花堂は彼が晩年を過ごした庵の名前である。建物は、明治の神仏分離で外へ移され、今では松花堂庭園として見学できるようになっている。今回の行き先は、その軌跡を追っている。

最後になってしまったが、この学会旅行には大きな利点、特権というものがあって、私達は中前先生がご尽力下さったおかげで、重要文化財の文書など、大変貴重な資料を特別に見せて頂くことができた。そしてなにより利点というのが、先生方と一緒できることで、いろいろな見所において先生方のお話や詳しい説明などを伺えるということである。名所、見所など、自分だけで来ていたら見逃してしまいそうな石碑なども、詳しい説明と共に、一つも漏らさず見てくれることができた。仁和寺の法師も学会旅行で来ていれば……まさに、「少の事にも先達はあらまほしき事也」である。

私は、国文学会旅行に参加して、本当に実りある一日を過ごす

ことができた。まだ参加したことのない方が、この文章を読んで興味を持って下されば幸いである。そして、中前先生、峯村先生、本当にありがとうございます。

女子大國文

第三百二十五号

平成十六年六月十五日 印刷  
平成十六年六月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町壹番地

編輯兼  
発行者

京都女子大学国文学会

電話 〇七五-五三二-九〇七六

FAX 〇七五-五三二-九一二〇

振替 〇二〇八〇-五-三二四

〒603-8204 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五-四二一-四一〇八(代)

FAX 〇七五-四三三-六二八二